

---

# Fate 外道な少年の聖杯戦争

終

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Fate 外道な少年の聖杯戦争

### 【Nコード】

N6835V

### 【作者名】

柊

### 【あらすじ】

偶然、答えたアンケートによって、転生した主人公。そんな、主人公は聖杯戦争を勝ち抜くため、卑怯？汚い？勝てば良いのだろうか？というスタンスで戦っていきます。

## プロローグ（前書き）

昔書いていた小説を改訂したものを投稿します。

## プロローグ

「なんだよ……………ここは？」

あたりを見回すが人はいないらしい。

おかしいな。なんか、変なサイトをアンケートに答えてたはずだが

……………

「やっと、起きてくれたか」

「誰だ？」

声が出た方に振り向くと、真っ黒なのっぺらぼうがいた。なんじゃありゃ？

3

「君は選ばれたんだよ。アンケート、答えたでしょ？」

「ああ」

にしても、変なアンケートだったな。正義についてどう思うだの、外道なことを平然とする勇氣だの、意味が分からん。アンケートする意味があるのか？

「最後に一つだけ聞くとよ。Fateの中で好きなキャラと嫌いなキ

「ヤラを答えて。君は好きだよな？」

「Fateは好きだが……、好きなキャラは言峰綺礼、嫌いなキャラは衛宮士郎だ」

衛宮は嫌いだ。正義とか馬鹿だろ。そんな慈善事業は出来ないし、やるうと思う時点ですでに駄目だ。まあ、所詮物語だから、関係ないが。

「思った通りの人間だ。君にやって貰いたいことがあるんだ」

俺に何をやらせる気だ。今更だが、こんなのっぺらぼうと話すのって気持ち悪いな。

「君には二次創作の主人公のごとく、転生してもらおうよ。行く場所はFateの世界。ちゃんと能力もあげるから」

「何言ってるの、お前？」

そんな馬鹿げたことを言い出すとは。中二病か？

「いや、本当に行ってもらおうよ。能力はそうだね、ガンダールブとナイト・オブ・オーナーを合わせたものとかどうだい。相手の武器の所有権を奪い、武器を自在に操れ、尚且つ、真名開放もできる。他には……相手の宝具を奪ったら、相手のスキルを奪える能力。」

魔力はイリヤぐらいでいいかな。後は、相手のサーヴァントに命令できる命呪」

人を無視しやがって。こんな、変な場所に居るのだから、嘘ではないみたいだな。」

「一つ聞いても良いか？」

「なに？」

「その話、俺に何のメリットがある？」

聖杯戦争は文字通り命をかける必要がある。メリットも無しに戦うなんてことは無理だ。

「確かに君にメリットは無いね。そうだね……………じゃあ、勝ち抜いたら願いをなんでも叶えてあげるよ」

「本当か！？」

どんな願いでも叶えてくれるか。確かに魅力的だな。こいつが言ったチート能力にもう少し足して貰えれば、勝算はかなりある。

「うん、本当だよ」

「よし 分かった。ただし、転生するのは、キャスターが瀕死の所で葛木がいない状態で。それにサーヴァントの属性を反転させる。これは、一体だけで構わない。後、キャスターから得られるスキルは二つで頼む」

「いいよ。あつ！それと、衛宮士郎は殺さないでね」

「なんでだ？」

衛宮はかなり楽に殺せるのに。

「まあ、所謂、主人公補正があるから殺したら流石に世界から追い出されるよ。ただし、衛宮士郎を殺さずに尚且つ、強化フラグをへし折らなければなんでもしていいよ」

ちっ！面倒だが消えるのは困るから殺さないで置くか。

「それじゃ、頑張つてね」

そして、俺はFateの世界に向かった。

「やっぱり、彼にして正解だったね。性格も多少弄ったかいがあるよ。今回は期待出来るから少々僕も介入してみるか」

そのまま黒い影は消えて行った。

## プロローグ（後書き）

この小説を読んでいただきありがとうございます。昔、自分が書いていた小説が見つかったので、投稿しました。良かったら見てやっ  
てください。

感想や意見もよろしくお願いします。

## 第一話（前書き）

二話目を更新します。

## 第一話

「転生したのか。とりあえず、状況の確認をするべきか」

俺が今、居るのは森。近くに廃墟がある。着ている服は主人公と同じ制服。近くに落ちていた鞆の中に入っていた生徒手帳から名前は神城京介。前世と同じ名前である。

「なるほど。交友関係は分からないが、ある程度のことには分かった。キヤスターがいるはずだが、どこに居るのだろうか？」

森の中を走り回りたくないのだが、仕方ないか。

「よし、行くか。……………って、何かこっちに来る？」

キヤスターか？いや、もしかしたら、他の奴かも知れない。武器は持っていないから、逃げる準備はしておくべきか。

「うっ……………あっ」

倒れた？ということはキャスターか。とりあえず、廃墟に連れていくか。

「う……………く。……………」

やっと起きたか。まったく、人を待たせやがって。

「……………貴方が助けてくれたのですか？」

「ああ、俺が助けた。一つ聞くが、お前は何のクラスだ？」

キャスターだろうけど、一応聞くか。

「……………っ！。そう、貴方、魔術師なのね」

「ああ、そうだが。一体何があつた？」

確か、原作だとマスターを殺して、消えかけたんだつたな。

「……………アサシンにやられたのよ。一応、倒したけど、この様よ」

「何!？」

アサシンだと!アサシンはまだ召喚されていないはずなのに。イレギュラーか。原作知識をあてにしたら、痛い目を見るな。

「どうしたの？」

「いや、なんでもない」

とりあえず、キャスターから宝具を奪うことにするか。

「で、お前は どうする?このまま死ぬか？」

「い、いえ、私と契約して。聖杯は貴方に差し上げるから」

普通のオリ主なら、ここで助けてフラグをたてるのだろう。だが、俺は普通ではない。契約してもあまりメリットがないから、ここで死んで貰うか。

「確かにそれは魅力的だな」

「そ、そうですね。なら……………」

「だが、断る」

ネタになってしまったが、まあ、良い。

「な、何故!？」

「別にお前と契約するメリットがないからな。じゃあ、命呪を持って、命ずる。キャスター、宝具を俺に渡してから、自害しろ」

「なっ!？」

さぞかし、驚いたことだろう。契約もしていない相手の命呪が発動したことに。

キャスターは絶望した顔をしながら、こちらに宝具を渡し、魔術によって自害する。

「第一段階はクリアできた。スキルを頂くとするか」

道具作成はいらなからな。陣地作成と高速神言を頂くとするか。キャスターの魔術はかなりのもの。更に、神言を使えば、殆どの魔術をタイムラグなしで使える。

「とりあえず、他の能力の確認をするか」

命呪は使えたから、ガンダールブとナイトオブオーナーを合わせた奴を使うか。

「とりあえず、この小枝で試してみるか」

外に落ちついた小枝を廃墟の壁に突き立てる。

「おいおい、マジかよ……………」

壁を破壊しただと!? ナイトオブオーナーによって、宝具化した上にガンダールブの効果で強化されたとはいえ、これはありえないだろう。

「何にせよ、これは使えるな。しかも、ガンダールブの効果は武器を操る効果もある。誰かの宝具を奪えたら、かなりの戦力強化になる」

更に武器と認識したものを強化できるのなら、魔術を強化することも出来るな。

「次は魔術を使用してみるか。空間転移!」

今、普通なら発音出来ない声を出したよな。スキルの効果とはいえ、結構怖いな。

まあ、空間転移には成功したから別に良いか。

「聖杯戦争に関与するのは、バーサーカー戦からにするか」

とりあえず、家に帰らず、桐生寺に行くか。まあ、洗脳すれば、何とかなるだろう。

## 第一話（後書き）

この小説を読んでいただき、ありがとうございます。

いきなり、キャスターとアサシンが退場しました。

まあ、基本的に自重はしないので、かなり原作から離れると思います。

感想や意見もお願いします。

これからもこの小説をよろしくお願いします。

## 第二話（前書き）

三話目を更新します。  
ラストを改訂しました。

## 第二話

結論から言えば、洗脳は成功した。まあ、蒼崎を上回る魔術師であるキャスターの魔術を使ったのだから、当たり前ではあるが。

「原作キャラとの接点無し。魔術師の家系でもない。これで少なくとも、遠坂などに探られる心配はない」

まあ、俺の存在がバーサーカー戦が始まる前にばれるのは困るからな。

ただ、今現在、最も重要視しなければいけないのは……

「命呪が無いんだよな」

この場合の命呪は本来の意味の方である。今のだと、契約は不可能らしい。

「にしても、危なかった。ガンダールプで命呪を確認していなかったら気付かなかっただろうし」

命呪を武器として認識したら分かった。ある意味チートだよな。

「今回の聖杯戦争、今現在、現界しているのは、バーサーカー、ランサー、ライダー、まだ、召喚されていないのは、セイバー、アーチャー、退場したのは、キャスターにアサシン。この時点ですでに原作から外れているな」

一応、金ぴか野郎も入れるべきなのだろうが、居るかどうか不明で分からない。まあ、あいつが居れば、俺の戦力はかなり上昇する。

「衛宮士郎も原作通り、ブラウニーをやっている。ここが変化されるのは、かなりきついから助かった」

まあ、二次創作のように、言峰士郎になられていたら、戦闘能力が大幅に上昇してしまう。

「後、考えないといけないことは、仲間にする人間」

これはかなり切実な問題だ。戦闘においては素人である俺が一人で勝ち抜ける可能性は低い。衛宮士郎は論外。あれと組むのは、無理だ。というか、組んでも仲間割れを起こすな、確実に。遠坂凜も駄目だな。聖杯戦争の概要も分かっているけど、あいつ自身が甘い。最悪、反発されて裏切る可能性がある。

他の奴も裏切る可能性があったり、実力が低い奴もいる。

正直、仲間にする奴が見つからない。

イリヤとか、バーサーカーがいる時点で手に負えない。

「となるとサーヴァントが必要になるが、命呪がない。まあ、聖杯に回収されているのがあがるが、契約するのがいない」

ルールブレイカーがあるから、手に入らなくもないが俺にとって都合がいいのはかなり限られる。アサシンがいないのはかなり痛いな。真アサシンがいれば、使えたのだが……。

「とりあえず、現在最も戦闘力のあるバーサーカーを倒すか」

バーサーカーはともかく、イリヤなら俺でも倒せるからな。バーサーカーにさえ、注意すればなんとかなる。

「バーサーカー戦は明日、準備は万全にしておこう」

そして俺は、バーサーカー対策のための準備を始めた。

## 第二話（後書き）

この小説を読んでいただき、ありがとうございます。  
今回は現状把握、次の話への伏線です。まあ、予想はつくと思います。

感想や意見もお願いします。

これからもこの小説をよろしくお願いします。

## 第三話（前書き）

後半、士郎とセイバーが空気です。

### 第三話

「これで準備は出来た。学校休んでまでやったかいはあるな」

今、俺がいるのは原作でバーサーカーと最初に戦った場所である。ここに俺はある仕掛けを施している。正直、イレギュラーで場所が代わっていたら涙目ではあるな。この日まで溜めた魔力を殆ど使ったのだから。

「気付かれないように隠蔽工作も施して完璧だ。後は空間転移を使用できる範囲内で隠れておくか」

戦いの様子も把握できるようにしてあるし、問題は無いだろう。後はあいつらが来るのを待つだけだ。

「あら、もう帰るの？夜はまだこれからなのに」

ようやく来たか。待ちくたびれたぞ。三時間も前から待っていたほどの身にもなってみる。

「こんな時間にどうしたんだ？キミ」

衛宮、緊張感がないだろう。現実味がないとはいえ、聖杯戦争について聞いたなら、少しは警戒をするべきだ。

「はじめまして。わたしはイリヤ。イリヤスフィール・フォン・アインツベルンと言えば分かるかしら？」

「なんですって!?!」

「遠坂。知ってるのか？」

「ええ、アインツベルン。聖杯を求める魔術師の家系。毎回、この戦いにマスターを送り込んでくるヤツらよ」

「あんな小さな子がマスターなのか!?!」

衛宮、見かけだけで判断しない方がいいぞ。あいつの魔力量は並な魔術師を大幅に越えているからな。

そう考えると間桐雁夜も可哀相だな。もし、イリヤ並の魔力量があれば、あの聖杯戦争で勝ち抜くことが出来たかもしれないのに。

まあ、勝った場合は本当の意味で絶望を味わうはめになるが。

まあ、そんなことはどうでも良いか。

今は戦いの方に集中しよう。

「そうだよ。お兄ちゃん。でもね、わたしは聖杯よりもお兄ちゃんを殺したいんだよ。おいでバーサーカー」

でかいな。俺なんか一発でやられそうだ。

「いけ！バーサーカー！みんな叩き潰しちゃえ！！」

「退がって、マスター！！」

バーサーカーとセイバーが打ち合う。かなりシユールな光景だな。身長がニメートルは越えているバーサーカーと美少女で華奢な体型なセイバーが互角に近い戦いが出来るなんて、普通は思わないだろう。

「逃げるわよ。衛宮くん」

当たり前判断だな。魔術師といえど、人知を超えた戦いに参加できるほど人間離れはしてないだろうし。

「待てよ、遠坂！あいつを置いて逃げるなんてできれわけがないだろ！」

「わからない！私たちはただの足手まといなのよ」

「セイバーなら隙を見て逃げることもできるわ。いったん退いてバ

「サーカーの対策をたてるべきや。今の私たちに勝ち目はない」

「二人でどこにいくの？作戦会議でもするの？でも、無駄よ。わたしのバーサーカーには勝てっこない。だって、わたしのバーサーカーはヘラクレス。古代ギリシャ最大の英雄なんだから！」

ヘラクレスとかいうチートを使いこなせるイリヤは怖いな。ただ、バーサーカーで出したのは頂けない。アーチャーなら確実に最強の名を得ることが出来るのに勿体ない。まあ、そろそろ準備はしておくか。

「サーヴァントとは英雄の魂を呼び出したもの。霊体である彼らの存在は人々の認知度に影響される。だから、この世に名が知れ渡った英雄ほど強くなる。だから、セイバーなんてザコにヘラクレスが負けるわけないのよ！」

実際な話、どうなんだろうな。アーサー王とヘラクレス、どちらが知名度が高いのだろうか？星座になっているからヘラクレスか？いや、創作の類でもよく出て来るアーサー王だろうか？

「そんなこと分からないわ！現に今、セイバーは……」

確実に吹っ飛ばされたよなセイバー。タイミングが良いな。まったく、衛宮がマスターで無かったら、まともに戦えただろうに。

「現に今、セイバーは……………つて、何かしら？」

さて、アーチャーが狙撃を開始するな。その後が狙い目だ。

「イリヤスフィール！残念だったわね。うかつに離れたことがあったの敗因よ！」

遠坂が魔術を発動する。イリヤなら簡単に防ぐことが出来る魔術だが、あれは罠。本命はアーチャーの狙撃だな。

「この程度で……………」

その瞬間、アーチャーから矢が放たれる。とんでもないな。弓の次元を軽く越えているぞ、あの狙撃

「え……………！？」

普通ならここまで終わり。だが、そこはヘラクレス。イリヤを守ることに成功したようだ。

「まさか、あの距離を一瞬で！？」

「無駄よ！バーサーカーがいる限りわたしは負けない。バーサーカー！先にそいつをやっちゃいなさい！」

ヘラクレスが遠坂に襲い掛かる。  
今だ！

「……………！？」

「え……………？嘘？」

「何があつたの？」

ヘラクレスは現在、俺の魔術で拘束されている。規模は違うが、プリズマイリヤのグレイプニルに似たようなものと考えてくれたら良い。後はナイトオブオーナーによって宝具化して、ガンダールブによって強化された包丁を持ち、空間転移する。

「しまつ……………！？」

そして、そのままイリヤの首を切り裂く。能力によって強化された包丁で切り裂かれたイリヤはそのまま絶命した。呆気ない幕切れである。後は、ヘラクレス。イリヤを殺したから暴走する可能性が高い。残り少ない命でも、俺を殺すには十分だ。殺されるわけにはいかないけど。

「!?」

拘束が解かれたか。こうなったら……

「コリキュオン」

ヘラクレスの右腕。正解に言えば、斧剣を持っている部分に当てる。

「!?」

俺の魔術によってヘラクレスは斧剣を落とす。俺はヘラクレスの斧剣の場所まで空間転移、斧剣を拾う。迫り来るヘラクレスの左腕。俺はそれを斧剣で防ぐ。

「嘘でしょ……」

まあ、ヘラクレスの一撃を防ぐなんてことをしたら当たり前か。最もバーサーカー以外には通用しないからな。ガンダールブで一流の剣を使っても、剣を習得するまでの過程と実戦経験がない俺では、最初はどうにかなってもそのうち負けるからな。

「 !? 」

恐らく、最後の一撃。ヘラクレスの体は既に消えてきている。その一撃は自分自身の残りの魔力をかけているのか、先程のものとは比べものにならない。ヘラクレスの乾坤一擲。それを俺は……………

「空間転移」

避けた。ヘラクレスの一撃をわざわざ喰らう必要はないし、別にいいだろう。ヘラクレスはこちらを憎んだような目で睨んでから消えていく。

「とりあえず、最大の障害は取り除けたな」

これで、ヘラクレスに怯える必要はない。

「ねえ、あんた、なんのサーヴァント?」

ん? 魔術師でなくサーヴァント? あっ! ? 今の俺の格好はローブを着ていて、顔も隠してあったから気付かなかったのか。折角だし、勘違いしたままにしておこう。

「俺か？俺はキャスターだ。今はお前達を襲うつつもりはないから安心しろ。では、俺はこれで」

そのまま、俺は空間転移でその場を離れた。

### 第三話（後書き）

この小説を読んいただきましたありがとうございます。

今回、ご都合主義がありました。ストーリー的に必要だったので、スルーしてください。

感想や意見もよろしく願います。

これからもこの小説をよろしく願います。

## 第四話（前書き）

今回後書きでアンケートがあります。

## 第四話

バーサーカーを倒した翌日。俺は通学路を歩いている。学校を休んでもいいが、この期間に休みが続けば、怪しまれるから出る必要がある。休んだ理由は両親もいないからでっちあげるのは簡単だ。

「やあ、おはよう。昨日、休んでいたけど大丈夫かい？」

「ん？」

誰だ？。俺が声のした方向を向くと一人の女生徒がいた。もしかして、俺の知り合いか？それだとまずいな。俺はこちらでの記憶が…

……

「!？」

「京介！大丈夫！」

頭が痛い。だが、分かった。あの女生徒は黒井奏。俺の唯一の友達らしい。友達が一人って、俺の人脈狭いな、おい。

「気にするな。少し頭痛がしたただけだ」

「そうか。良かった。急にうめき声をあげたから、心配したよ」

「俺なら大丈夫だ。それより早く学校に行こう。遅刻するぞ」

「そうだね。分かった」

そして、俺たちは学校に向かった。

昼休み、友達がいらないらしい俺は黒井奏と食堂へと向かう。黒井奏という女は世間でいう所の美少女である。その横に冴えない男の代表のような俺が横に居ると、どうなるかくらい簡単に分かる。

「なあ、奏」

「どうしたんだ？京介」

「視線がかなり痛いのだが」

男から嫉妬の視線がこちらに向けられる。まさか、俺はこんな視線に毎日耐えていたのか。

「いまさらじゃないか。いい加減なれたらどうだい？」

「この視線をスルー出来るお前は色々凄いよ」

廊下だけでこのレベル。食堂なら更に上昇する恐れがある。胃薬を買ってきかもしれん。

「あれは衛宮と間桐。喧嘩をしているみたいだな」

「どうした、京介？まさか、止めに行く気のか？」

「そんな訳ないだろう。何故、俺がそんなことをしないとイケない」

メリットも無いし、部外者が入れれば、むしろこじれる可能性もある。

「賢明な判断だね。下手にかばうと後が怖いし」

「そういうことだ。早く行こう」

俺は衛宮と間桐の喧嘩をスルーして食堂に向かった。

「京介、君は相変わらずよく食べるね」

「そうか？そこまで食べてないだろう？」

カツ井とカレーとうどんくらい、一般的な高校生なら食べるはずだ。

「昨日、風邪を引いていたみたいだけど、その様子なら心配は必要ないみたいだ」

「微熱だったから、昨日休んだらすっかり治った」

対外的には軽い風邪ということにしておいた。时期的にも有り得ない話ではないので、普通に大丈夫だった。

「ねえ、京介」

「なんだ？」

「しばらくの間、夜に出歩くのはやめておいた方がよいよ」

何故、黒井奏がそれを知っている！！まさか、黒井奏は魔術師か！だとすると、俺の正体がばれている危険性がある。

「夜に何かあるのか？」

「なに、最近物騒だから、夜に出歩くのは自重した方がよいと言っただけさ」

俺と敵対する気はないのか。いや、気を抜いたら、いつ寝首をかかれるか分からない。何にせよ魔術師である可能性が高い。

「ああ、夜は出来るだけ出歩かないようにするよ」

「そうか。なら、私としては安心だな」

この反応を見るに俺のことを一般人と思っているのか？警戒はしてなければならぬな。

「奏。俺はトイレに行ってくるから、先に教室に帰っておけ」

「分かった」

そのまま、俺は遠坂あてに手紙を書く。

内容は屋上に仕掛けられている魔法陣は時間稼ぎのものということ。これを使い魔に持たせ、屋上に待機させておく。これで、衛宮が死ぬ確率は減っただろう。今回は特に関わる気はないからな。

「これで、作戦の半分は遂行できた。戦いに出るのはライダー戦が終わった後。そこから、本当の意味で俺の聖杯戦争は始まる」

そして、放課後になり、俺は家に帰った。

## 第四話（後書き）

この小説を読んでいただきありがとうございます。

今回出て来たオリキャラについてですが、急に決めたものなので、具体的な魔術が思いついていません。なので、良ければ考えていただけないでしょうか。魔術の方向性は自分が戦闘するより味方のサポートに徹しているものです。ぜひよろしく願います。

感想や意見もよろしく願います。

これからもこの小説をよろしく願います。

## 第五話（前書き）

今回の話はライダー戦までの繋ぎなので、特に面白い所はありませんし、ストーリーにもあまり関与しません。

## 第五話

「徹夜したから眠いな」

家に帰ったあと、ある魔術の再現を徹夜でやっていた。ライダー戦までに完成させないと、俺の計画が破綻する。まったく面倒だ。

「徹夜なんて珍しいね」

「ん？なんだ、奏か。面白い本を見つけて、徹夜で読んでいただけだ」

「そうか。君らしいね」

そういえば、こちらに来てからあまり本を読んでないな。一段落着いたら、この世界の本を読みあさるか。

「あれは、間桐とその妹。兄妹喧嘩……には見えないな」

ゲームでも思ってたけど、公衆の面前で妹を叩くのは、色々まずいだろ。下手すれば、教師に呼び出されてもおかしくない。

「まったく間桐君は何をしているのだろうね。ん？あれは遠坂さんじゃないか？」

遠坂は無事だったようだ。衛宮もいるしな。二人に死んで貰う訳にはいかないからな。

「まあ、遠坂がなんとかしてくれるだろ。俺たちが入りこむ余地はない」

「それもそうだね。私たちには関係のないことだし」

その後、教室で授業が始まるまでたわいもない会話を黒井奏としていた。

俺は今、柳洞寺に居る。もちろん、セイバーや衛宮が来ることはない。竜牙兵は原作のように送ったが、キャスターの姿はメディアにしている。あちら側は困惑している可能性が高いな。キャスターが二人もいるなんてことは有り得ないのだから。ちなみに魂喰らいはしていないから、ここを悟られる可能性は低い。最悪、逃げればいだけだし。というか、セイバーがここに攻めてきたら、一瞬でやられてしまう。佐々木小次郎がいらないのはかなりきついのだ。

「それにしても問題は衛宮だな。原作と同じように剣の鍛練をして

くれるかどうか」

元々アサシンとの戦いで、セイバーと衛宮が口論になって始めたことだから、今の状態では動機が低いしな。衛宮一人で鍛練はするだろうが、セイバーとの稽古はしないかもしれない。ここになってアサシンが存在しないことが痛手になるとは想像してなかった。

「所詮そこは神頼みか。衛宮が死ななければなんでも良いが」

早くライダー戦が終わらないかな。終わらないとこちらは手の出しようがない。

とりあえず、あの魔術を完成させないと。

そのまま、俺は夜遅くまで魔術の開発に当たった。

## 第五話（後書き）

この小説を読んでいただきありがとうございます。

この次の話からライダー戦。その後について主人公が本格的に動き  
ます。

主人公の活躍をお待ちください。

感想や意見をお待ちしております。

これからもこの小説をよろしく願います。

## 第六話（前書き）

ライダー戦前半です。楽しんでください。

## 第六話

遂に今日はライダー戦だ。細かな修正もしておいた。例えば、イリヤが衛宮に間桐の魂喰いを見せる所は俺自身が出向いて行ったりした。さらに屋上の出来事は使い魔で知ることが出来る。これで大丈夫だろう。

「他者封印

ブラッドフォートメントロメダ  
鮮血神殿」

来た。教室の前に衛宮が通っていくから一般人のふりをして倒れておく。

「く………！」

そのまま、衛宮は屋上まで走っていく。

「やっぱり行ったか。衛宮が解決してくれるだろうから心配はないか。ところで奏、早く起きたらどうだ？」

「やっぱり君も魔術師だったか」

そんなことを言いながら立ち上がる奏。  
魔力を体中に巡らした瞬間に確信出来た。

「君は聖杯戦争の関係者かい？まさかマスターではないよね？」

「まさか。俺は聖杯に選ばれ無かった魔術師だ。お前の方こそマスターではないよな？」

「私はマスターだったただけだよ。序盤でキャスターにやられたからね。まだ、教会には行ってないけど」

まさか、アサシンのマスターが奏だったのか！奏という魔術師の存在がイレギュラーの原因か。

「間桐についてはどうする？俺は少しあいつに用事があるから屋上に行。お前は？」

「私はやめておくよ。アサシンもいないし、肝心の礼装もあまり強力なものを持って来ていないからな」

奏の魔術については気になるな。どういふ魔術なんだろうか？

「俺は屋上に向かう。とりあえず事情は後で説明してやる」

「死なないでね」

「そんなこと分かっている」

そして俺は屋上に向かった。

屋上に行くとは衛宮とライダーが戦っていた。

にしても、凄いな。ライダーを前にして怯えずにいられるなんて。

ライダーが衛宮を蹴り飛ばした？流石の衛宮も屋上からの落下だとかなりやばいだらう。助けに入るべきか？

「来い！セイバー！！」

成る程、令呪を使ってセイバーを呼び出しか。関与するのはもう少し後で構わないか。

「シロウ！！大丈夫ですか、シロウ？酷い怪我だ。手当てを……」

「間違えるな、セイバー。俺の体よりこの結界を止めるほうがさきだ」

「任せてください、マスター。私は貴方の剣つなりましょう！」

衛宮もやるな。今回は衛宮の助けをするか。上げてから叩き落とすのが基本だ。

「衛宮士郎にセイバー。ライダー戦、手伝ってやる」

「貴方は！」

「お前は……キャスター」

「なに、マスターの指示でね、君達を手伝うことになったんだ」

「本当か？」

「当たり前だ。手伝いが要らないのなら帰るが？」

「いや、手伝って貰う。セイバーも構わないな？」

「ええ、構いません」

「後、俺はキャスターだ。接近戦は出来ないから、前衛は頼むぞ」

魔術を除いたら、一般人の俺にはライダーと戦う勇氣はない。

「じゃあ、戻るぞ。おそらく、アーチャーとそのマスターがライダーと戦っている可能性が高い」

「分かりました。シロウ、行きましょう」

「ああ。キャスターも早く！」

「慌てるな二人とも」

そして、俺たちは階段から屋上へと向かう。

……こいつら、俺が転移出来るのをすっかり忘れてたやがる。

「屋上だ。早く突入するぞ」

俺たちは階段で全力疾走をして、屋上まで来た。

「じゃあ、行くぞ」

屋上の扉を開ける。目に映ったのは間桐がアーチャーに殺されかけ  
ている所だ。

「セイバー！慎二を助ける！」

「ですが……」

「良いから、早く」

「分かりました」

セイバーは渋々とした様子で間桐を守りに行く。衛宮は甘すぎるだろう。殺しにかかった人間を助けるなんて正気の沙汰じゃない。

「衛宮くん？どういつつもり？」

「遠坂、お前に慎二は殺させない」

「！」

「結界や魂喰いは止めさせる。最悪、ライダーを倒せば良い話だ。俺は慎二をギリギリまで説得する。遠坂、もし慎二をやるって言っただったら、俺はお前と戦ってでも慎二を守る」

本気でこいつの頭の構造が知りたくなつた。人間じゃないな。俺にはそんな考えは出来ない。

「このバカ！あんたまだそんなことを！」

「それに関しては同感だ」

「キャスター！？」

少し衛宮士郎と話してみるか。

「なあ、衛宮。お前、何を言っているのか、分かっているのか？」

「分かっている」

「じゃあ、聞こう。衛宮、何故慎二を守る。そいつは自分の判断でお前を学校のみんなを殺そうとした。そんな奴を助ける義理はないだろう？」

「慎二は聖杯戦争に躍らされているだけの被害者だ。だから、俺は慎二を助ける」

「衛宮、お前は本気でそう思っているのか？」

「え？」

「だとしたら、衛宮。それはお前の自己満足に過ぎないんだよ。間桐は聖杯戦争に躍らされた被害者なんかじゃない。間桐は自分の欲望のために聖杯を求めたマスターだ。それ以上でもそれ以下でもない。自分の欲望のために他人を傷つけた間桐をお前はまだ助けようと思うのか？」

「当たり前だ。俺は慎二を殺させやしない」

「そうか、衛宮。なら、お前はいずれ味わう。本当の絶望を」

決めた。俺は衛宮を潰す。そのための作戦を展開することにしよう。

「貴殿らは私に隙を見せてしまった」

ライダーが首に釘剣を刺す。

そしてその血が魔法陣を描く。

「危ない！」

俺はその場に防壁を張る。ライダーの攻撃は防げたが逃げられてしまった。

「チ、逃げられたわね」

遠坂のそんな声が虚しく響いた。

## 第六話（後書き）

この小説を読んでいただきありがとうございます。

今回はライダー戦の前半です。後半は明日か明後日になると思います。

これからもこの小説をよろしく願います。

## 第七話（前書き）

半分程、サルベージに成功したので投稿します。

## 第七話

「どつやら結界は消滅したようだ」

確かに結界は消滅したが、ライダーに逃げられたのはかなりの痛手だ。

「こつしちやいられない。慎二を追おう、遠坂！」

まさか、まだ遠坂と協力関係があると思っっているとは。普通に考えたら、協力関係なんて無いに決まっているだろう。

「馴れ馴れしくしないで、衛宮くん。貴方には失望したわ。まさか慎二を庇って私たちの行動を妨害するなんて。これ以上共闘を続ける意味は無いわ。貴方は貴方で好きにするといい。だけど、私たちの邪魔をするのなら、容赦しないわよ」

普通に去って行く遠坂。さて、俺も暗躍をしようか。

「俺もライダーを追う。ちなみに、お前らと組むつもりは無い。先程のように裏切られるのは御免だからな」

衛宮たちにそう言うてから、空間転移でその場を離れた。

衛宮たちと離れて数時間。俺は今、ライダーのいるビルの近くに居る。何故かと言えば、衛宮たちが来るのを待っているからである。ライダーは三騎士ではないとはいえ、対魔力はBランクと高めであるため迂闊に手は出せない。狙い目はライダーとセイバーが戦っている間の間桐慎二。ライダーが戦っている間はフリーだからな。

「セイバーとそのマスターが現れました。では、行きます」

ライダーがセイバーと衛宮の方へ向かったな。よし、行くか。

「空間転移」

そのまま、間桐慎二の後ろに回りこみ、間桐慎二を洗脳する。

「う……………あ……………」

間桐慎二の洗脳に成功した。取り敢えず、間桐慎二に身を隠すこと

と偽臣の書を渡すよう命令する。

これにより間桐慎二が見つかる確率は激減したが、見つからないわけでは無い。勿論、対策はしてある。衛宮に間桐慎二の幻影が見えるようにした。誰もいないビルの上で一人芝居をさせれば良い。これで時間稼ぎは万全だ。

「後はセイバーに宝具を使わずにライダーを倒すだけだな」

セイバーとライダーが戦っている方を見る。今の所は互角の戦い。ライダーは釘剣を使ったり、バイクを使ったりとトリッキーな戦いをしている。流石にセイバーを相手に正面から戦うわけではないか。一方、衛宮は誰もいない屋上で一人でなんかしている。やった本人が言うのもあれだが、流石にあれば可哀相だ。衛宮が主人公に相応しい台詞をいうたびに、涙が出そうになる。あつ！木刀に強化の魔術をかけて振り回している。これ、幻影を解いた後、トラウマにならないよな？

衛宮はスルーしよう。見るに堪えない。

セイバーとライダーの方もそろそろだな。

介入するタイミングはライダーが魔眼を使ってセイバーの動きを止めて、たたき付ける瞬間で良いか。

「あまり貴女にばかり時間はかけられないので、少し急がせていただきます」

「魔眼！？だが、この程度で………！！」

「確かに私の魔眼はサーヴァントに対してはそこまでの効力は持ちません。ですが、接近戦においては僅かな隙が命取りです」

ライダーがセイバーを掴み、地面にたたき付ける。よし、行くか。

「この程度で倒せる相手ではないでしょう。追撃をかけると……………」

ライダーに後ろに転移して、偽臣の書でライダーに死ぬように命令する。

「ぐっ……………!？」

ちっ、流石に抵抗するか。まあ、動けないのだから、殺すのは簡単だ。

「ライダー、お前にはリタイアして貰う」

俺はバーサーカー戦の時に回収した斧剣でライダーの首切り付けるを。命令に抵抗して動けないライダーはそのまま首をはねられる。そこまでの達成感はないが、一応ライダーは死んだことだ。撤退するとしてよう。

ちなみに衛宮が可哀相だったので、幻影と本物をすり替えておいた。

## 第七話（後書き）

この小説を読んでもいただきありがとうございます。

今回はライダー戦の後半。

次の話はオリキャラを仲間にするのと、武器の調達です。  
プロローグは改訂しました。主人公が聖杯戦争に参加する理由を追加しています。

何か不備があれば、すぐに訂正させていただきます。

感想や意見もお待ちしています。

これからもこの小説をよろしくお願いします。

## 第八話

ライダー戦後、俺は今学校に居る。

何故なら、学校には奏という魔術師が居るからだ。

「取り敢えず、君の目的はなんだい？」

さて、奏にどこまでの情報を与えようか。

奏が使う魔術は不明。実力も未知数ではあるが、遠坂よりは弱いだろ。だが、奏を仲間に加えれば作戦の幅が広がる。まずは様子見と行こうか。

63

「目的と言われれば、勿論聖杯を狙っている」

「サーヴァントもないのに？」

当たり前前の反応であるが仕方ない。令呪が改造されたおかげで正規の使用が出来ない。ただし、改造されているだけで元はただの令呪ではあるため余計にたちが悪いが。

「そのことについてだが、俺と手を組まないか？」

「……………私にメリットは？」

メリットね……………。奏にとってなにがメリットになるかは不明だが、一般的なメリットを挙げるとしよう。

「まず、一つ聞くがお前は遠坂に勝てるか？」

「多分勝てないね。魔術回路の差もあるし、私の魔術は死体を操る魔術。満足に死体を手に入れることは出来ない現状で戦いを挑むのは無謀なだけ」

やはり遠坂には勝てないか。なら、これもメリットの一つになる。これを含めたら、俺自身が持つ手札は三つという所か。

「そうか。なら、こちらが提示出来るメリットは、遠坂や他の魔術師を倒すこと、サーヴァントの提供、後は死体の提供くらいだ」

「それは本当か！？」

「ああ、ただし二つ目はもう少し先で、死体の提供は今は一人が限度。ただ、生前は優秀な一般人であるから問題ないと思う」

「ただそれに証拠は無い。君が裏切る可能性がある」

確かにこちらにそれをする確証は無い。なら、相手が信じる要因を

作るだけ。

「確かに俺がそれをする証拠は無い。だけど、これならどうだ？」

「これは!？」

俺が取り出したのは自己強制証文。これには、こちら側を対象にした殺害、傷害、裏切りの意図および行為を永久に禁止にするかわり、先程の条件必ずを行うということが記されている。

ついでに言えば、こちら側も相手に手を出すことは出来ない。

「本気がい？」

「当たり前だ。俺は聖杯がどうしても欲しいからな。で、どうする？」

「契約させてもらうよ。君なら信用出来るからね」

「そうか、ありがとう。それで作戦の方だが、今日と明日、どっちが良い？」

出来れば、今日が良いが無理強いをするわけにはいかない。

「作戦の内容にもよるね。複雑なのであれば明日の方が良い。」

「まあ、そこまで複雑ではないさ。少し耳を貸せ」

奏に作戦を教える。

「これは！？確かに成功すればかなりのものだけど、失敗したら確実に死ぬよ」

「ああ、分かっている。だけど、これくらいしなければ実力において負けているこちらに勝機は無い。いやなら、俺一人でもやる」

元々、一人でやろうと思っていた作戦だ。参加しなくても支障は無い。を使役して貰えたら充分だからな。

「いや、君と同盟を結んだんだ。作戦に参加させて貰うよ」

「そうか、では作戦を決行するでしょう」

俺たちは衛宮家に向かった。

## 第八話（後書き）

この小説を読んでいただきありがとうございます。

少し皆様に尋ねたいことがあります。

一つは冬木市に陸自があるかどうか。

これによってストーリーがかなり変わってくるので、よろしく願います。

なお、あるという場合は今回の話が変更になるので、更新は多分無理だと思います。

二つ目は主人公の戦闘。

主人公に敵とまともな戦闘をして欲しいかどうかです。

まともというのは、敵と正々堂々ではないにしろ、普通の戦い方で敵と対決することです。

ちなみに、まともな方が選ばれても、まともには戦うのは一回だけです。ですので御了承ください。

一つ目の方は明日の午後6時。

二つ目は来週の火曜日の午後12時でさせていただきます。

感想や意見の方もお待ちしております。

これからもこの小説をよろしく願います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6835v/>

---

Fate 外道な少年の聖杯戦争

2011年9月4日03時07分発行